

法政大学文学部 90 周年を迎えて

法政大学文学部長 宮 川 雅

法政大学文学部は 1922 年に、すでに設置されていた法学部の中に文学科と哲学科を置く法文学部という形で誕生しましたので、2012 年は創設 90 年の節目の年にあたりました。そこで 90 周年を記念する事業を開催すべく、2011 年秋にワーキンググループを発足させて準備を進め、文学部教職員の協力のもと、記念事業の第一弾企画として 2012 年 7 月 21 日（土）午後、市ヶ谷キャンパスポアソナータワー 26 階スカイホールにて、「文学部で培う社会人力」と題するシンポジウムを開催いたしました。

今日、大学生の就職難が社会問題となる中で、大学に問われているのは、学生に社会人として必要となる力を身につけさせられるか否かです。ともすると実用的ではない教育・研究をする学部とみられがちな文学部において、それを可能にし得ることをきちんと社会に訴えてゆくことがこれからの文学部にとって重要なことと考え、このようなシンポジウムを企画した次第です。

当日は本学文学部の学生やその父母、教職員のみならず、他大学の教職員、また文学部への進学を考えている高校生、進路指導に携わる高校教員、キャリア教育関係者など、学内外から 100 名あまりの方々がご参集くださいました。そして、各講演や話題提供を受けて、社会で働くにあたってどのような力が必要とされるのか、文学部でその力をどう培えるのか、文学部卒業生は社会人としてどのような点を強みにできるのか等について、共に考えることができたのではないかと思います。

参加者の方々からは、「グローバル化した社会では、文学部のもつ学問の多様性、柔軟性が必要だと思う。硬直化した今の日本社会を変えるため、従来の諸科学間の高い壁を突き崩してほしい」、「自信を持って、思考力・表現力をもつ人間に育てていただきたい」、「就活に対しての不安がなくなりました」（在学生）、「文学部に行って将来大丈夫か、という思いが消えて、自分の道を決められてよかった」（高校生）等の声をお寄せいただきました（以上、参加者アンケートより）。

以下に、このシンポジウムの成果を広く共有するため、法政大学文学部紀要の紙面を借りて、改めて当日の概要を報告します。

なお、本シンポジウムの企画・準備、およびシンポジウム報告の取りまとめ作業を担当したワーキンググループのメンバーは、以下のとおりです。

小林ふみ子（日本文学科准教授）、利根川真紀（英文学科教授）、後藤篤子（座長、史学科教授）、荒井弘和（心理学科専任講師）、宮川雅（2011・2012 年度文学部長、英文学科教授）、高橋敏治（2011 年度

文学部教授会主任，心理学科教授），加藤昌嘉（同副主任，日本文学科教授），田村理恵（学務部学部事務課文学部担当主任）。

蛇足ながら，90周年記念事業の第二弾企画としては，新たに奥田和夫（哲学科教授），小倉淳一（史学科准教授），中島弘一（2012年度文学部教授会主任，地理学科教授。高橋敏治と交代），伊海孝充（同副主任，日本文学科准教授。加藤昌嘉と交代）に新たにワーキンググループに加わってもらい，2012年12月1日（土）午後に「文学部 Home Coming Day」を実施しました。当日の様子は文学部ホームページ（www.hosei.ac.jp/bungaku）でご覧いただけます。本シンポジウムの様子も同ホームページのTopicsに掲載してありますので，あわせてご覧いただければ幸いです。

法政大学文学部 90周年企画シンポジウム 「文学部で培う社会人力」

開会挨拶 徳安 彰

第1部 いかに社会人力を養うか 司会：高橋敏治

「大学での学びは社会で働く力を高める」 藤村博之

「進路をひらく！ 言葉のチカラ」 山田ズーニー

「評価力を鍛える！ — プロジェクト型演習の可能性を探る —」 山田和人

第2部 法政での実践 司会：後藤篤子

「基礎ゼミから卒業論文まで」 川崎貴子・福田由紀

「文学部卒の底力」 芳野詩子・近藤和樹・夏目享宏・持田隼人，進行：小林ふみ子

全体討議 司会：後藤篤子

閉会挨拶 宮川 雅

開 会 挨拶

法政大学 常務理事 徳 安 彰

皆様、ようこそ今日は文学部 90 周年のシンポジウムへお越しいただきました。大学を代表して、一言ご挨拶を申し上げます。

今日のシンポジウムのタイトルはなかなか逆説的で、「文学部で培う社会人力」となっております。法政大学の文学部といいますと、歴史をさかのぼって、必ず「夏目漱石門下の内田百閒、その他の人々が集って」というところから紹介が始まります。つまり、文学、小説のようなことをやっていた方々が、学部をつくるときに非常に大きく貢献し、その礎を築かれたというわけです。世の中で文学者や小説家といわれる方たちは、社会人力がないとは言いませんが、およそ浮き世離れた方向にいると思われる人たちで、本学文学部のルーツはそこにあります。

法政に限らず、文学部という学部は、世の中では最も浮き世離れた学問をやるところだと思われております。実は私自身も文学部の卒業です。高校生のときに「大学はどこへ行くのだ」と尋ねられて「文学部だ」と答えたら、案の定、親から「おまえ、文系に行くなら法学部、理系に行くなら医学部とか、そういうことは考えないのか」と言われてしまい、親と 1 週間口をききませんでした。世間一般のイメージはそのようなものです。そのような文学部で「培う社会人力」という逆説的なタイトルであります。

今日のシンポジウムの主催者は文学部ですが、実は今、法政大学全体で「就業力を育てる 3 ステップシステム」という就業力 GP のプロジェクトに

取り組んでおります。後でお話いただく藤村博之先生がその中心になっておられますが、そのことともリンクしながら、今日の話が進んでいくものと考えております。

私が——また自分のことになりますが——文学部に進学して唯一喜んでくれたのは、高校の担任の先生でした。その先生も文学部の卒業生です。その他の先生たちは、自分で言うところちょっと嫌らしいのですが、「あいつは学校の中でトップを争う成績であったのに、文学部に行った」という反応でした。つまり、トップを争う人は大体が法学部に行かなくてははいけないのですね。「なのに、文学部に行ったところが…」と、私が卒業して 30 年たってもまだ、先生が生徒に言いふらしている変な高校なのですが、要は、それが文学部に対する一般的な見方ということです。

入ってみてわかることは、私が行った文学部でも日本全国の文学部でも、実は 90 数%の学生は他の学部の学生とまったく変わらず、社会人として社会に出ているという事実です。では、文学部を出た人たちが日本全国で社会人力の劣る人たちばかりかということ、そんなことはまったくないわけです。むしろ逆のケースがいくらかでもあります。

そうすると、実は文学部の教育の中に、社会人力を養う非常に大事なエッセンスが隠れているのではないかと。みな「文学」という言葉にだまされて、「文学」イコール「浮き世離れ」、「浮き世離れ」イコール「社会人力なし」、というふうに見るわけですが、まったくそうではない。むしろ、

文学部だから養われる社会人力が実はあるから、世の中で文学部卒はちゃんと活躍をしている。そのように私も考えるわけです。

そこらあたりの秘密の一端を、本学の文学部のスタッフが中心になって、今日は皆様と大いに語

り合おうという、そのような趣旨のシンポジウムであると思いますので、よろしく最後までお付き合いをお願いいたします。簡単ですが、主催者からのご挨拶といたします。本日はどうもありがとうございます。



大学での学びは社会で働く力を高める

法政大学大学院 藤村博之
イノベーション・マネジメント研究科教授

ただいまご紹介いただきました藤村と申します。私は今、社会人向けの大学院イノベーション・マネジメント研究科で、人事労務を教えています。私の専門分野が企業の人の問題を扱うことですので、日常的に企業の人事担当者とお会いをして、採用状況とか、企業内の育成とかについて議論しています。

今日は、一昨年度から本学が取り組んでおります、就業力育成事業について、基本的な考え方をお話して、文学部で学ぶことが働くようになって必要とされる能力とどう関係しているのかをお話ししていきたいと思えます。

まず、大学教育の現状です。私は、今回、この就業力育成支援事業を担当するに当たり、大学教育は働くようになって必要とされる能力の育成に貢献してきた、大学教育はなかなかいい線いっていることを出発点にいたしました。ただ、問題は教員がそれに気がついていないことです。先生方の中には、講義の枕詞として、次のようにおっしゃる方がいらっしゃいます。「君たちね、僕の講義を聞いても社会に出て役に立たないけどね」。これでは、学生たちが大学で学ぶことは役に立たないと思っても無理はありません。ここを変えていくことがまず必要だと考えました。

大学は、何を教育してきたかといえますと、論理的な思考の訓練だと思います。学生たちの職業生涯は 45 年間続きますから、基礎体力をつくるのが大学教育です。そこで、働くようになって必要とされる能力を次の三つの点から捉えています。「文書作成力」、「情報収集・分析・発信力」、「状況判断・行動力」です。

例えば、「文書作成力」の基本は、誰かの話を

聴いてその要点をつかんでメモを作成することです。会社に入って一番最初に求められるのは、会議の議事録作成や、上司・先輩と一緒にお客さんを訪問して訪問記録をつくることです。これは、大学で講義を聴きながら教員の話の要点のメモをとることで鍛えられます。この一点をとっても、大学教育は働くようになって必要とされる能力と結びついていることがわかります。

新卒者の就職が難しい理由は、需給バランスが崩れていることにあります。需要があまり伸びないのに、供給が増えているのです。当然のことながら供給側である学生側の就職が難しくなります。企業側は、日本市場が人口減少のために縮小傾向にありますから、この市場を維持していくために、新たに多くの人材を雇う必然性が乏しくなっています。

供給側の他の問題として、能力低下があります。最近の学生は少子化の中で育ってきましたから、与えられることに慣れていきますし、教えられることに慣れていきます。小さいころから、待っていれば親が全部持ってきてくれた。小・中・高と先生方は非常に懇切丁寧に教えてくれた。大学に入って、大学の講義を聴きながら、わからないことがあると、教員の教え方が悪いんだと彼らは考えます。自分の理解不足、知識不足は棚に上げて、先生の教え方が悪いと平気で言ってくる。このような人材を企業は採用したいと思いません。

それから、大学生の供給量が増えてきています。昭和 50 年の進学率は 26% で大学生が 42 万人いました。その後、18 歳人口は減ってきたのですが、進学率の上昇とともに大学生の数は増えていきます。需要があまり増えていない中で供給が増え

るということは、当然のことながら供給側にとって厳しくなるということになります。ただ、求人倍率を見ますと、1を超えています。1.27というのが今の4年生の求人倍率です。

問題なのは、大学生の大企業志向が変わっていない点です。5,000人以上の大企業の求人倍率は0.60です。2人の学生が一つの会社を目指しますから、競争は厳しくなります。逆に300人未満の中小企業に対しては、1人の学生に3.27社がうちに来てほしいと言っています。ですから狙い目は中小企業なのですが、学生たちは行きたがりません。

その辺の事情として、母親の影響力がとても強いのです。新入社員が入りましてミスをする。課長が少し厳しく叱責をいたしますと、すぐに泣く。すぐに辞める。母親が出てくるそうです。お母さんから電話がかかってきて、「うちの僕ちゃんに何をしたの」。笑い話ではありません。現実です。

企業側の大きな変化として、採用してから企業内でゆっくり育てる余裕をなくしていることがあげられます。大学が昔からやってきたことは決して間違っていないのですが、入学してくる学生が変わってきています。それから、卒業後に学生たちが就職をしていく先の企業の対応が変わってきています。ですから、私たち教員は、これに合わせて変えざるを得ないと思います。

学生の就職活動にも大きな問題があります。一つは早期化です。3年生の12月から就職活動が始まるなんて狂っていると思います。それから長期化です。この仕組みは実は誰も幸せになっていません。企業の採用担当者に聞いても、こんなに早く始めたくないと言います。彼らの本音は、4年生の秋ぐらいから始めて2~3カ月で終わる。これが正常な姿だと思います。しかし、いわゆる就職関係の会社が、早くやらないといい学生を採れませんよと、企業側の危機感をあおって、いまのような状況になりました。

現在の採用活動は、学生の学ぶ権利を妨害していると思います。大学4年生の4月、5月、6月というのは、会社説明会とか面接があるというこ

とで、大学の講義に出席できない状況です。

本学の学生が平均的に取る単位数で単純に学費を割りますと、1コマ当たり3,000円ぐらいになります。企業は、採用活動の名の下に、講義やゼミを受ける権利を侵害していることになります。このスライドは企業の人事担当者に対して、皆さん方はこんなひどいことをやっているのですよということでお見せするときに使っています。これはコンプライアンス上の問題ではないかという話もします。ただ、これを主張するためには、大学教育がしっかりしていないといけません。

こういう問題意識を持っている会社が徐々に増えてきました。例えばキャノンマーケティングというキャノンの販売会社があります。キャノンマーケティングは「学業の妨げになりたくないの、4年生の採用活動は夏休みに入ってから始めます。それまでは一切やりません。」と言っています。学業に配慮してくれる会社を私たちは応援をしていきたいと思います。

大学は、この10年ぐらい、キャリア教育と称してさまざまな新しい試みをしてきました。ただ私自身キャリアセンター長を4年務めている中で、大学のキャリア教育はちょっと間違っているのではないかと思うようになりました。大学生が卒業するためには、130単位ぐらいの講義とかゼミを履修する必要があります。これは非常に太い柱です。この太い柱をそのままにして、もう一本キャリア教育という柱を立てて、そちら側に学生たちを誘導していったというのが、ここ10年ぐらいのキャリア教育だったと思います。

そういう場所に行きますと、例えば先輩が話をしてくれる。あるいは企業の人事担当者が来て、いろんな会社の仕事について話をしてくれます。それはそれでおもしろいのです。ただ、そうやって受けている先輩たちの話と、自分がふだん講義・ゼミを受けていることと、一体何がどういうふうにつながっているのか。そういうのがわからないままに、キャリア教育というのが展開されてきました。ここが問題なのです。本学で取り組んでいます「就業力」の育成というのは、まさに太い柱

である 130 単位の講義・ゼミのところをしっかりとしていこうということになります。

大学教育の核心は何かというと、論理的に考えて、議論を通して理解を深めることです。その象徴的な行為が論文を書くということです。文学部は卒業論文をととても大事にしていっています。論文を書くためには、まず問題意識を持って、仮説を設定し、資料収集をして、その仮説を検証し、最後に「残された課題」を整理します。このプロセスは、会社に入って必要とされる能力とびたりと一致します。

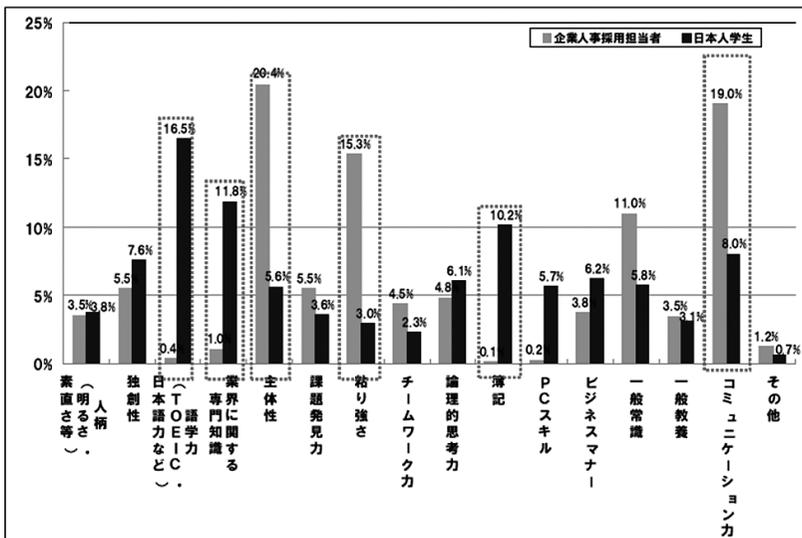
例えば新製品を出したけれども売れいきが悪いという状態が起きます。さあ、どうするか、対策を立てなければなりません。まずは、売れていない理由について仮説を立て、仮説を検証するための情報収集をします。場合によっては自分たち

でお客様の意見を集めるということも必要になってきます。集めた情報を使って、どの仮説が最も適切か。これを検討し、売れなかった原因を確定して解決策を提示し、それを実行していきます。論文を書くというプロセスと全く同じことが、会社の中では繰り返されています。そういうことが、これまで学生たちにはほとんど知らされることがなかったのです。

大学生と企業との認識ギャップがあります。経済産業省が 2006 年に「社会人基礎力」を発表し、この関連でいろいろな調査がなされています。今日お示しをしたいのは、1-1-2 のグラフです。アミは企業の採用担当者の回答です。黒は学生側の回答です。これを見ると、学生と企業の採用担当者の間で大きな認識ギャップがあることがわかります。

1-1-2 自分に不足していると思う能力要素【対日本人学生】
学生に不足していると思う能力要素【対企業】

- ・企業側は学生に対し、「主体性」「粘り強さ」「コミュニケーション力」といった内面的な基本能力の不足を感じている。それに対して学生は、技術・スキル系の能力要素が自らに不足していると考えている。
- ・企業側が「学生に求める能力要素」と学生が「企業から求められていると考えている能力要素」ならびにその水準には、大きなギャップが存在する。



※上位3つまで回答

n : ■ 2958 ■ 4095

例えば、企業の採用担当者たちは、「主体性」、「コミュニケーション力」あるいは「粘り強さ」が学生には欠けていると思っています。でも学生たちは、自分たちに欠けている能力は、「語学力」、「簿記」「業界に関する専門知識」となっています。なぜこの認識差が生まれるかという、「即戦力」という言葉が誤解されているからです。

企業は、即戦力が欲しいと言います。学生たちはその言葉を受け取ったときに、すぐに役立つ能力だから、資格だと思っています。でも、会社側はそんなことは求めてないのです。会社側が求めているのは、一般常識です。これは非常に曖昧な言葉ですが、一般常識というのは、先ほど申し上げたような、人の話を聞きながらメモを取って、議事録をつくる能力です。

採用担当者は、自分の頭で考えて行動できるという人材が欲しいと言っています。自分で問題意識を持って、データを集め、その問題を解決していこうとする人材です。大学生が昔からやってきた活動がちゃんとできる人が必要だと言います。

大学教育で重要なのは、方法論を教えることだ

と思います。知識の部分は、すぐに役に立たないことは確かにあります。でも、研究していく上で方法論は、どんな学問分野でも共通したものがあ、それは働くようになって必ず役に立つと思います。

まとめますと、次の三つです。「論理的に考えて柔軟に発想する」「状況を判断して自分の頭で考えて行動する」「変化に対応できる能力と心の強さ」です。文学部で勉強することは、人間に対する理解を深めることだと思います。経済学は、「人間は合理的に行動する」ことを前提にして学問を組み立てます。そんなことないですよ。人間って、相当、非合理的な動物です。文学部の方々はそれを一番よくご存じです。会社で働くようになったときに、相手は人間ですから、人間をどう理解して、そういう人たちにどう対応するかが重要になります。文学部の人こそ、そこを一番わかっていると云えるのではないかと思います。

以上で、私の報告を終わります。どうも、ご清聴ありがとうございました。

進路をひらく！ 言葉のチカラ

文章表現・コミュニケーション
インストラクター 山田ズーニー

進路をひらくときに、最も大切なチカラ、あなたは何だと思いますか？ もちろん、正解のない問題ですが、「自分にあった答え」を持つことが必要です。

進路をひらくときに、最も大切なチカラとは？

私の経験から、ぜひお伝えしたいことがあります。まず最初の5分間だけ、用意してきた原稿を朗読させていただきます。聞いていただけると幸いです。

「言葉を生むチカラ」 山田ズーニー

私には人生で最も辛いとき、奮い立たせてくれたかけがえのない言葉がある。偉い人の言葉ではない。好きなスターの言葉でもない。自分の中から、生まれてきた言葉だ。

小論文編集長として16年間、高校生の文章表現教育に携わった私は、38歳のとき、志あって会社を辞めた。ところが、どの出版社も企画部門

を出したがない。フリーの編集者が、ほぼ成立しない現実を知る。

天職と信じた編集を失い、再びどうやって社会に入っていいかわからなくなってしまった。一件の仕事も、一人の私を待つ人も、ない日々が続く。私は自分が何者かもグラグラとわからなくなっていった。

初めての本は、そんなトホホなときに書いた。小論文編集の経験を買われ、文章術の本の依頼がきたのだ。私は孤独に咽びながら書いた。

書くことは孤独だ。言いたいことが言葉にならない。やっと思っても、自分の正体を見てへこむ。初めての本が書けなかったらどうしよう、売れなかったらどうしよう、と不安が押し寄せる。気がつくくと三週間も人と口をきいてない。毎日毎日たった一人で三度三度ごはんを食べる。

「自分は編集者として生きていくはずだったのに、なぜ毎日こんな苦しい書くことをしているんだろう？」

孤独で孤独でどうしようもないときは、自転車で駅に人を見に行っただ。しばし人の温もりを感じ、帰ってまた独り書く。七ヶ月全身全霊で書いた。

本の最後の言葉が、どうしても書けなかった。とうとうこの日に書かなければ出版に間に合わないという日まで、私は朝からぶっとおしてたった数行を書いては消し書いては消し、気がつくると夕日が差し込んでいた。

精魂絞っても一滴も出ないボロ雑巾と化し、なんとか数行メールで送ったものの、まだ足りない。編集者さんも腑に落ちないようで、電話でこう言った。

「たった一言でいい。この本を読む一人の読者に、最後に何か、言葉をかけてあげて。」

「読者」！と聞いた瞬間、編集者の自分が呼び起こされた。胎動が始まった。

自分は孤独ではなかった。七ヶ月ずっと自分の中に読者がいた。読者である「あなた」がいたから、あなたに伝えたいことがあったからこそ、がんばれた。

私の最初の本を読む「あなた」に、私がどうし

ても伝えたかったこと、それは、

あなたには書く力がある。

ずっとずっと私の根にあったマグマのような想いが、七ヶ月かけて、いま、言葉になった！安堵と喜びがこみあげる。次の瞬間、「あ、これが私！」と気づいた。わっ、と涙があふれた。

所属がなかるうが、肩書きがなかるうが、それがどうした。

向かう一人の表現力を伸ばす。

これが私だ！いまも、小論文の編集者をしていたときも、これから。

何も恐くなかった。生んだ言葉に、自分がある。読者がいる。自分と読者がつながっている。

私の居場所はここにある！

無限の勇気が湧いてくる。メールの向こうで編集者さんも泣いていた。

あなたの言葉が聞きたい。

私は心からそう思う。メディアの受け売り、偉人の引用、それもいい。

けれどそんな手垢のついた言葉より、あなたの畑から生やした言葉のほうが、きっと何倍もあたたかい。

たちどまって自分に問いかけ、自分の想いを、自分の言葉で表現して行ってほしい。

あなたには言葉を生むチカラがある。

おわり

社会に出るとはどういうことでしょうか？

社会は、人、物、お金、サービスが、激しい勢いで循環している大海原のようなところです。社会に出るとは、この大海原に、自分から何か貢献して、その対価である報酬を得て、自分と社会の「へその緒」をつなぐこと。これが社会に出ることです。

しかし、大学卒業の22歳やそこらで、社会に何か貢献し、単身でへその緒をつなぐというのは、非常に難しいことです。それゆえ、多くの人が選ぶのが、就職ではなく、就社です。私も大学を卒業した22歳のとき、就職ではなく、就社を選びました。

会社は、この大海原ですでに信頼を得て自由に泳ぎ回っている船のようなものです。あなたは、この船の乗組員となることで、間接的に社会に出て行きます。これが就職ではなくて、就社なんです。

会社という船の乗組員として間接的に社会に出ていくか、腕や頭に職をつけて単身で社会に出て行くか、いずれにしても社会に出て行くということは、自分と社会をへその緒でつなぐということです。

このとき、言葉を生むチカラ、つまり、表現するということが、どうしても必要です。あなたが自分の想いを考え、表現しなければ、社会の方が、あなたの手をどのように引いていいのかわかりません。

進路をひらくために最も大切なチカラとは、と問われれば、私は、表現するチカラだと答えると思います。「言葉で自分の想いや考えを表現するチカラ」だと。

よく、「言葉じゃない」と人は言います。たとえば、「黙って抱きしめる」、これでも人と通じ合えます。「生きてるだけで素晴らしい」、これもとても素晴らしいことです。「なんとなく受け止めてもらってる」、それでもかまいません。

にもかかわらず、私はどうしても、言葉を基軸に社会とつながりたいし、言葉を芯に置いて仕事をしたいと思います。

なぜなら、自己確立をがんばってきた大人には、「深く理解されたい、認められたい」という気持ちがあります。自分らしさというものを大切に育て表現してきた私には、つまり、かけがえのない自分というものを形成してきた私には、「生きていだけで素晴らしい」、もうしわけありませんが、それだけでは満足することができません。

言葉というものは、その人間の思考・人格・アイデンティティというものを深く表すことができますし、逆に言えば、言葉で表現することによって、私自身の生きてきた文脈・アイデンティティ・思考・人格というものを、深く人に理解してもらえるのだと思います。

では、想いを言葉で表現するということが、具体的にどうすることなのでしょう？

ここでは、高校生の例でお話したいとおもいます。私の姪のA子です。私にはA子という姪がいるのですが、A子は大学受験のときに、自分の想いを言葉で表現できずに苦しんでいました。

A子の、伝わらない志望理由書を読んでみます。

「中学のとき、児童相談所を訪問したのをきっかけに、社会福祉士になろうと思いました。」

言っていることはわかるのですが、説得力がありません。なぜなのでしょう？

文章の大原則は「意見と論拠」、自分の結論を明らかにし、理由を筋道立てて説明して相手を説得する。これが社会で通じる文章の大原則です。

A子の文章。まず、結論はあります。論拠らしきものもあります。児童相談所を訪問したという実体験を論拠に、意見と論拠を述べているのに、なぜ、通じないのでしょうか？

論拠を説明しなさいというと、多くの人はA子のように、実体験とか、新聞等で見聞きした具体例を挙げることができます。

でも具体的な事実から、「～だから私は」と結論に飛んでしまっていないのでしょうか？

論拠としてとりあげた事実から、A子自身がどう考えてその意見を出したのか。

事実→考察→意見の「考察」部分を、社会は知りたいわけです。

A子に言いました。実体験として児童相談所を訪問したことをあげた、そこまではよくできている。だけどそのときに、A子ちゃん自身がどう感じ、どう考え、社会福祉士を目指すに至ったのか、それを言わないと通じないよ、と。

そのとき、A子は岡山弁でこう言ったんですね。「おばちゃん、なんかあるんじゃないけど、自分でもそれがなんなんかわからんわあ。言葉にできんわあ。どうすれば、言葉にできるん？文章に書けるん？」と。

言葉は氷山のようなものです。水面下の奥の奥

に、まるで熱いマグマのように、一生の仕事を決めた衝動が熱いマグマのように燃えています。

でも A 子は、これを言葉にして人に伝えられないばかりか、自分でもこの正体がなんなのかわからないんです。不自由というのはこういうことだと思います。

自分の熱い想いはあるのに、自分の言葉で表現できない、自分の想いで人や仕事や将来と関わることができない、これこそ非常に不自由なことだと私は思います。

書き手の最も奥にある想いのことを、小論文の言葉で、「根本思想」と言います。本当の想いは、深層にあります。氷山で言えば、水面から顔を出しているような浅いところにはありません。そして、自分の深層と交信すること、これこそが、「考える」作業です。つまり表現するためには、「考える力」が要るんだということです。

考える方法を習ったことがあるでしょうか？考えるということは自分に問う作業です。自分の頭で考える道具とは、「問い」です。

何か聞かれたとき、私たちはすぐ、「答え」を探します。しかし、大きな問いにいきなり答えることはできません。たとえば、生きる意味は、と聞かれて、今すぐ答えられる人はいるでしょうか。いませんよね。それは、問いが大きすぎるからです。

自分の頭で考えるためには、具体的で小さな問いをいくつもいくつも出し、自問自答、自問自答、自問自答……、「あ、私が伝えたかったのは、まさにそれだったんだ」と、はっきりするまで続ける作業、これが考えるという作業です。

A 子にも、いろいろな疑問を投げました。

A 子ちゃん、児童相談所に行ったんだよね？
when, いつ心が動いた？
where, どこで心が動いた？
who, いろんな人の話を聞いたなかでだれの発言が一番心に残っている？
how, その人の話を聞いているときどんな気持ちでした？

what, 児童相談所に行く前と行った後で、一番変わったのは何？

why, それはなぜ？

というふうに。

問いかけ、それに答えていくうちにどんどん思考が前に進んでいく。逆に言えば、思考停止とは、問いが立たなくなる状態です。

問いかけるときに、1つだけ、コツがあります。

それは、問いを立てるエリアです。過去・現在・未来、社会・世界へと、できるだけ視野を広げながら問いかけることが必要です。同じところばかり掘るのでなく、時間空間の広い視野から問いを立てた方が、自分の立ち位置がはっきりします。

A 子は、問いという道具を使って、過去・現在・未来、社会・世界へと、視野を広げながら、自分に問いかけるということに挑戦しました。

A 子は、まず過去、今まで 18 年間生きてきた自分の過去にダイビングしました。

過去を振り返ったときに、A 子は中学・高校の 6 年間、老人ホーム訪問したことを思い出しました。そのとき、どの老人ホームに行っても、必ず聞く言葉、お年寄りの「家へ帰りたい」という言葉がよみがえったのです。

A 子はその言葉をもって、つぎに視野を現在の社会へ広げました。お年寄りの福祉をめざす A 子は、老人ホームがどんどん建っている現代の社会背景を観て、「社会福祉士を目指す自分のやるべきことは、お年寄りを老人ホームに斡旋することなんだろうか？」という問題意識がわいてきました。

その疑問を抱いて、A 子は、視野を未来へ広げました。未来を見るときのキーワードは、「WANT=やりたいこと」です。

A 子は自分自身が老いて死んでいくときに、きれいな老人ホームに入りたいか、それとも地域に巡回システムなどがあって、最期まで自分の家で過ごしたいかと考えました。

そのとき、確信が突き上げてきました。人が年老いて死んでいくためには、見慣れた街の風景と、見

慣れた人たちの顔と、住み慣れた自分の家が必要だ。私がやりたい仕事はそういう仕事なんだ、と。

そんなふうに18歳ながら、視野を過去へ、現在の社会へ、未来へとひろげ、自分の頭で考え、書き直してきた志望理由書を見て、私はちょっと涙ぐんでしまいました。中学のときに一生の仕事を決めたときの想いを、言葉にしたいとも、何年も言葉にすることができなかった想いを、A子がきちんと言葉に表現していたからです。

事実：中学のとき、私は、児童相談所に訪問に行った。

考察：そのとき、私は「人には一人ひとりそれぞれ違う、歩いてきた道のりがある」ということに気づかされた。それが福祉の始まりだと気づかされたから、

意見：だから私は社会福祉士になりたい。

A子は考えることで何年も経て、本当の想いを言葉で表現することができたのです。

つまり、「人には歩いてきた道のりがある」と。

A子はいま24歳で、岡山で社会福祉士としてスタートを切っています。そう、想いは通じたのです。

自分の想いを表現すること、これがまず、社会でスタートする第一歩です。

しかし、もし表現しても通じない、あるいは、会社の配属で希望のところに行けない、など、自分の想いが叶わなかったら、どうしますか。やりたいことがやれなかったら、どうしたらいいんでしょうか。

そもそも、やりたいことってどこにあるんでしょう？ 自分の中にある？ それとも、世界中を探したら落ちている？

恥ずかしいことですが、私自身も実はとても長いこと、自分の中にあると思っていました。大学4年のときに、ほんの思い込みから、編集者になると誓って、私は、やりたいことというものは、だれもが、もともと自分の中に授かっていて、そ

の才能を持っていると信じ込んでいました。ところが、38歳のときに会社を辞め、いまの日本では、どの出版社も企画部門を外注しながらない、フリーランスの編集者がほぼ成り立たないという現実にあたります。私は、天職と信じた編集の仕事の仕事を失い、再び社会にどうやって入っていったらいいのかわからなくなってしまったのです。

私は、直接社会とつながっていたわけではありませんでした。会社という船とへその緒がつながっていたのです。会社を辞めた、ただそれだけのことだと思っていたのに、実は、社会から切り離されていた。

当時、「好きなことしかやりたくない」という私に、尊敬する先輩が、

「自分の中に好きなこと、やりたいことがあって、自分はその才能を持っていると信じ切ってしまったとたん、人とのつながりを断ち切ってしまうところがあるように思うの」と言いました。この言葉は、当時、噛んでも噛んでも、全く私にはわからない言葉でした。

でも、いまはわかります。自分の可能性というものは、自分でやりたいか・やりたくないかと決めつけるものではなく、人や社会に引き出され、導かれて、見つけていくものではないかと先輩は言いたかったんだと思います。

当時、社会に入りあぐねていた私に、ある人が、「山田さん、小論文の編集長として、高校生の文章力を伸ばす仕事をずっとやってきたんだよね。メール社会になって、一般の人でも文章を書くのに苦労している。そういう人に役に立つ、実用のふりをしたコラムを書いてくれないか。」

糸井重里さんという人が、私に文章術のコラムを書くように依頼してくれたんです。

編集者を天職と信じていた私にとって、自分自身が文章を書く、つまり書き手にまわるということは、想像だにできなかったことです。やりたいことの候補にすら上がってこなかったものでした。ところが、それ以外に社会に入る手立てがないので、私は、もともとやりたいことではない「書く」ということを、全身全霊でやりました。

すると、どうでしょう。読者が、「山田さんのコラム、役に立ったよ。おかげで就活でしっかり文章が書けて成功したよ！」と言ってくれました。そんなふうにして、またまた書く仕事のオファーがどんどんくるようになる。もともとやりたいことではなかったが、社会から呼ばれたり、評価されたりするのはうれしいので、私は、また全身全霊で、一生懸命、頼まれた仕事を受けて、それまでの自分の経験、想いを表現し続けました。

一生懸命、一生懸命、表現していたら、私は再びまた社会とつながっていました。今度は、個人として、就社ではなく就職。私はいま、フリーランスとして、教育の仕事を通して、社会に貢献します。そして、社会からは、へその緒を通して、報酬だけではなく、「ズーニーさん、役に立ったよ、ありがとう」、社会からの愛のようなものも入ってきます。私はいま、単身で、この社会とへその緒をつなぎ、社会を自由に動き回る、その自由を感じています。

やりたいことはどこにある？ と聞かれたら、私は、表現して人とのつながりの中に見つけていくものだ、と答えます。

つまり、「ひらけ！」ということです。好きなことしかやりたくないというのは、自分の世界を閉じてしまった状態です。かといって、逆になんでもやりますでは、社会の方も、あなたの手をどういうふうに引いていいかわかりません。

このどちらでもなく、「志をもって、ひらいてる」という状況が必要ではないかと思います。

「ひらく」ということ、この言葉を言い換えると、「理解と表現をくり返すこと」だと私は思います。これから社会に出て行く人にとって、理解と表現というものはとても大事です。

社会と自分をつなぐ設計図を考える上で、一番シンプルな方法は、自己理解と仕事理解、業界をめぐる社会背景の理解、この3つの理解に立って、将来の展望を文章にしてみることです。

まず自己理解、そして、やりたい仕事に対する理解、そして背景となる社会や人への理解。大事

なのはこの3つのつながり、自己と仕事と社会がつながるまで、3つの要素を書き換え、更新し、考え続けていくことが大切です。そこから、仕事を通して社会を1ミリでも2ミリでもよくしていけるとしたら、自分は仕事を通じてどのように社会をよくしていきたいかという志を打ち出していきます。

自分の想いを社会に対して発信すること、これは表現です。そして、表現すれば、必ず、その反応が返ってきます。この反応を受け止めて、自分で噛み砕いていくこと。それが理解するということです。

この理解と表現には、言葉のチカラがどうしても必要です。人間は言葉で他者に内面を表現し、言葉で思考し、言葉によって、人や社会と繋がっていく生き物だからです。

ですから私は、文学部で、人間と言葉について考え、言葉を拠点にし、言葉を砕き、言葉で自分を表現し、言葉で世界を理解し、言葉で世界とつながっていくみなさんのことを、大変素晴らしいと思います。

これからも、言葉で自分を表現し、外・他者・社会とつながって行ってください。

今日、あなたが使う言葉、進路を考える言葉、

それは、あなたらしいか？

そこに勇気はあるか？

勇気をもって自分を表現して行ってください。最後になりましたが、

あなたには考える力がある！

あなたには自分を言葉で表現する力がある！

あなたは社会に必要な！

今日はこれを言いに来ました。

どうもありがとうございました。

評価力を鍛える！

— プロジェクト型演習の可能性を探る —

同志社大学文学部
国文学科教授 山田和人

同志社大学では2004年に現代GP〔プロジェクト主義教育による人材育成〕に採択されたことを契機に文学部にプロジェクト科目を新設し、2006年から全学共通教養教育科目として、正課でプロジェクト科目を開講しています。この授業は、プロジェクト・ベースド・ラーニング（Project-Based Learning：以下、PBL）を導入した学生主体の実践型教育で、公募制でテーマを募集し、往還型地域連携活動として実施しているものです。現代社会の抱える課題と正面から向き合っており、考え抜く力を磨くことを目的とし、伝統的なテーマも現代的な課題としてとらえるようになっています。目指しているのは、知識を習得・体系化することではなく、知識を総合・統合すること、社会に偏在する知を総合化する力を養うことです。これまでPBLは、理工系、医療・看護系、情報系、社会学系の専門科目の中に導入されることが多かったのですが、教育プログラムとしては、全学共通教養教育科目に設置されている数少ない文系のPBLとしても注目されています。

最初にPBLの狭義の定義、プロジェクトとは何かを確認しておきましょう。「一定期間内に、一定の目標を実現するために、自律的・主体的に、学生が自ら発見した問題に取り組み、それを解決しようと、チームで協働して取り組んでいく創造的・社会的な学び」としておきます。「人と協働」という点が鍵となります。他人とともに働くとき、必ず対話や議論がともないます。そのプロセスでは、必ずチーム内でお互いに評価しあっているはずですが、しかしその「評価」をどうするか。

その力を鍛えるプログラムは、実は日本の教育プログラムの中にはあまりないのです。そこで、PBLの協働を通じて、自らキャリアデザインできる「評価力」を備えた人物を育成しようというのをねらいとしています。

このPBLプログラムを通じて、学生はこれまで評価される客体であったのが評価する主体へと立場が変わります。課題発見・解決を行い、発表することを通じて、個人での知識のインプットからチーム学習によるアウトプットを重視するようになり、また活動記録・議事録などのプロセスを重視するようになります。つねに相互に評価し合うことで、他者からの客観的な評価と自己評価ができるようになる。そうした変化を目指しています。

さて同志社大学文学部国文学科の初年次教育「日本文学基礎演習」（1年次必修科目）の取り組みを紹介しましょう。学部定員は120名で、6クラスを設置し、1クラス春・秋学期教員各1名、計6人で担当しています。

基礎演習の到達目標は「大学の学びについて学ぶ」こと。つまり次の2つを掲げています。

何を学ぶか

- 文学研究入門として表現のおもしろさや研究の楽しさを知ること。
- 議論や対話によるゼミの学びを通じて自発的学習意欲を誘発すること。

いかに学ぶか

- ・個人学習からチーム学習の対話と協働へと変化させ、あらかじめ課題を提示するのではなく自ら課題を発見し解決する学習へと変えてゆくこと。

この「チーム学習」というのがすべての鍵となるところです。そこで2008年度からプロジェクト型演習に切り替えたという経緯があります。

さて、そのような学習を通じて習得が想定される学習基礎力・スキルは次のようなものでしょう。まずは専門とかかわるところで、

文献検索／文章表現力／文章読解力
／情報リテラシー

さらにチーム学習によって社会性を養うことで、

コミュニケーション力／プレゼンテーション力
／リーダーシップ・サポーターシップ

これらをチームによる課題発見・解決学習の中で学生が自ら身につけ、その「運用能力」を重視するようになることを目指しています。

私のクラスでは、『忠臣蔵検定』を作るという課題を設定しています。検定問題は、人形浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』を題材にして、一人ひとりが見つけた課題に即して作成する四択の選択肢問題です。問題（問題文・選択肢）・正解・解説・参考文献が基本ユニットになっています。

なぜ忠臣蔵なのか。忠臣蔵について聞いてみると、学生は「話に聞いたことはある」「テレビや映画で見たような気がする」というようなことを言いますが、原作の『仮名手本忠臣蔵』は読んでことがないのです。何となく知っているが、詳しく知っているわけではない、その意味では「既知と未知のバランスのとれた教材」です。その点で、学生がみな同じラインから一斉にスタートを切ることができる教材でもあるわけです。

また、「忠臣蔵」には多くの人物が登場し、義士とその周辺の人物を巻き込んだ多彩な群像劇として描かれています。艱難辛苦あり、若者の恋あり、親子の情愛ありと、幅広い出来事が一年四季折々の出来事に集約的に表現されている、「切り口が多様な教材」といえます。ちなみに他作品でも試みたことがありますが、今のところ、『仮名手本忠臣蔵』が最も課題発見に適した教材です。この教材の吟味が、このような学習において非常に重要なところです。

さてこの課題『仮名手本忠臣蔵』検定問題作りにはどのような意義があるのでしょうか。まず、これまでの学習経験のなかで、とりわけ受験勉強において常に解答する側の立場にあった初年次の学生は、検定問題を作るという体験によって、自分が解答者の立場から出題者の立場に移行することになります。この授業では、そうした立場の逆転によって、学生の学びのパラダイムを転換することをねらっているのです。それは文学研究に即していえば、読者の立場から作者の立場への転換を意味しており、受け手から作り手への意識転換とも言えます。これは大学で文学を研究することについての基本的な考え方のフレームを学ぶために必要なプロセスということもできます。

また問題作りでは、解答者を意識して作問しなければならず、必然的に評価される側から評価する側に立ちます。そこでは常に一般性と客観性が求められることになります。ここでいちばん重要なことは、自分自身の問題を作成することを通して、作品の中にどのような課題を見つけることができるかを自ら問いかけなければならないという点です。私は学生たちにそうした問題作りを通して、自ら課題を発見し、課題を探索する喜びを感じ取ってもらいたいという期待をもって臨んでいます。

さて、授業スケジュールを、春学期の場合に即して紹介しましょう。

- ・4月中1回目に授業のねらい（ガイド）をレク

チャーした上で、文学的に読むことの基本をワークショップ形式で伝えます。また仲間作りのためにも、ワークショップを活用しています。

- 4月中2回目にはチームとテーマをそれぞれの意志的選択のかたちで決定します。前の週に最初の課題として1週間で『仮名手本忠臣蔵』を読破すること、各自考えてきたテーマによってチームを編成し、チームテーマや個人課題を決めることを課題として予告しておきます。それを発表し合ったのち、互いに自由に動き回ってチームを編成し、チームの名前・リーダー・ルールを決めます。
- 4月中3回目冒頭あたりで、問題作りについて説明しています。参考文献や先輩の作成したサンプルを提示して、問題作りのイメージをつかませ、個人とチームのモチベーションを引き上げるようにするためのしかけですが、そのまま真似することのないように配付はしないのが重要です。
- 5月末から6月初めの2回分で中間報告会を行い、その場の質疑応答とデジタル・ポートフォリオ上において自由にコメントしあいます。この時の小さな成功・失敗体験によって、テーマ・問題の再構築を行うチームも出てきます。
- 7月初めから3回分をかけて、最終成果報告会を行います。ここでは中間発表からの深化を自ら確認することになります。ここで「忠臣蔵検定評価表」を配付し、記入しながら問題の解説を聞き取ります。この評価表を発表チームが持ち帰り、それをもとにミーティングを行い、その成果を生かして最終レポートとしてチームごとに完成した検定問題を提出して、授業が終了します。
- 最終回の15回目には振り返り会を行っています。それに先立って自己の努力や果たした役割、その経験の意義を振り返る「自己評価表」に記入し、それを互いに参照しながら評価資料とします。自分も評価者として自身の活動をきちんと評価し、説明できるようになることを目指しています。これをもとにしてチームごとに成績

会議を開き、自己評価を修正する機会を設けた上で、各自根拠を示して全員の前で評価点を発表する。ここでまさに、プロジェクト学習において互いに評価しあうプロセスの中でどれだけ評価力がついたかが試されるわけです。

この授業は、普通の教室ではなく、写真のような教室を私が設計して作ってもらって、そこで展開しています。50畳のフローリング・スペース、25畳の畳座敷スペース、25畳の土間スペースからなっています。学生は土間スペースから靴を脱いで上にあがります。フローリング・スペースは、ふだんは何も置いていません。そこに、1人用の寺子屋風の机が30数個積み重ねられていて、その都度自由に出して使います。全フロアに無線LANが配備されていて、充電されたパソコンをチームで1~2台持ってきて、その場で電源を入れると、インターネットに接続できます。

何もない空間というのは、コミュニケーション・ベースの学習にはとても効果的です。ワークショップを行う場合、何もない空間が威力を発揮するのです。逆に、プレゼンテーションの時には、整然と配列された机の聴衆に向かって話すことで、フォーマルなスピーチであることを意識させることが大切です。空間を使用者が自由にレイアウトすることができるので、毎回、オープンスペースのなかに、自分たちの学びの空間を作り出していくことができます。

学生は毎週、どのような活動を行い、それをどのように記録しているのでしょうか。

授業時間(火曜2限)内に20~30分のレクチャーを受け、授業内ミーティングを行ってそれを議事録としてまとめます。さらに授業時間外に週1回のミーティングを義務づけ、それも議事録に残します。それ以外に随時、個人学習を行い、活動記録として残すのですが、それらをすべて学習支援SNSにデータとしてアップロードすることになっています。これは全員が見ているわけで、しないわけにはいかない。そのすべての情報にメンバー

がコメントをつけることで情報共有することになりますし、さらにスケジュール管理を行うことになります。そのしくみによって現在進行形で随時、自己評価・他者評価・相互評価を行うことがコミュニケーション力につながっていきます。

学生は、このプロセスを通じて、「安心・安全基地」となるコミュニティを形成してゆきます。「おしゃべり」というなかまのコミュニティから、「勉強会」的な学びのコミュニティへ、さらに「プロジェクト」というチームのコミュニティへと、成長させてゆくのです。プロジェクト型演習がうまくいくかどうかは、学生自らが形成してゆくコミュニティのクオリティが大きく関わってくると言えるでしょう。それゆえ、コミュニティ形成支援のための環境や条件を整える必要があります。

ここで重要なのが、デジタル・ポートフォリオを活用し、現在進行形で評価活動を行えるようにしていることです。まず自らの学習履歴を振り返る効果があり、さらに個人だけでなく、チームでリフレクションとフィードバックを行うことができるからです。それを通じてチームへの帰属意識を養い、そのなかで自らのポジショニングを行います。そうしてチームが「安心・安全基地」となって、メンバー間で相互に信頼・期待しあいながら協調学習を進めていきます。

実際のチームごとのデジタル・ポートフォリオへの投稿の様子を、2009年のチームごとの週別の投稿総数のグラフを例に見てみましょう。実際の春学期間約3ヶ月（投稿開始4月21日、投稿終了7月25日）の投稿総数は、学生の投稿数が1394、教員の投稿数が329、総投稿数が1723に及んでいます。投稿数は、自己紹介文・振り返り文・中間報告の問題と週1回提出の議事録・活動記録と、アップされた文書に対するコメント数です。これらの記録が、学生同士にも教員にとっても貴重な学習履歴として現在進行形で活用されたことが数字の上でも確認できます。受講生数は、

4人編成チームが5、5人編成チームが2、合計30人でした。

ポートフォリオはチームメンバーに限らず、他のチームにも公開されています。議事録も活動記録も全てが公開されて、それらを自由に参照し合うことができるようになっています。学生には議事録と活動記録のアップの指示とともに、必ず全てにコメントをつけるように伝えています。こうした議事録や活動記録に対するコメントが、記録した学生本人に対するあたたかいフィードバックとなり、お互いの信頼関係を強化していくことにつながります。チームメンバー同士の間にしだいに信頼と期待、励ましと癒しをもたらすようになっていきます。学生同士のコメントの交換が次の議事録や活動記録を書き続ける原動力になっていくのです。

ここで起っている事態を観察すれば、そこには「安心・安全基地」としてのコミュニティが形成されていっていることがわかります。学生は、通常の授業時間だけで成長するのではなく、学生自身が形成したコミュニティをベースにした授業外の活動によって、自らの学びを深化させていくのです。

なお、教員が適宜コメントを返していくことも、もちろん学生との信頼関係を作りあげていくうえでは重要です。ただし、従来の課題提出と同様に理解して先生と生徒との一対一の関係と誤解すると、学生間のコメント付けが活力をもたなくなるので、教員がひたすらコメントをつけるというのは効果的ではありません。むしろ、弊害をもたらすかもしれません。大学での学びが高校時代の個人学習にあるのではなく、ゼミナール形式の授業であって、チーム学習による学生相互が学び合う協調共感学習にあることを実感させるためには、学生同士が対話を通して、他者へのリスペクトを実感し、意見交換することの喜びを感じるからこそが、初年次の学生の学びのパラダイム変換には重要だと思えます。

さて、先にも述べた学生自身の総合的評価は、

このポートフォリオのプロセスもふまえて行われます。自己評価・他者評価・相互評価を基本とし、ミーティングごとの議事録・活動を報告する活動記録・コメント、アクセス数などによるポートフォリオプロセス評価、さらに成果物・プレゼンテーションによる客観評価というすべての評価指標から、学生が総合的に自己評価を行うのです。

プロジェクト型演習というかたちで、このようにしてチームの力を通じて個をはぐくんでゆきま

す。学生の潜在力を引き出し、評価する力を育てていきます。「知りたい」から、調査・分析し、それを総合する経験によって研究力へ。「ともに学びたい」から、相互支援・相互批判しあうことで教育力へ。「役に立ちたい」から、社会貢献へとつなげて社会力へ。「認められたい・認めたい」から、信頼・敬愛を育てて評価力へ。承認を得ることは学生にとって次のステップへの指針となり指標となります。プロジェクト型演習の協働はこうした力を引き出すものとなっているのです。

基礎ゼミから卒業論文まで

法政大学文学部
英文学科准教授 川崎 貴子

「文学部で培う社会人力」というテーマで、世間一般で期待される内容といえますと、「コミュニケーション能力」と「文章作成能力」というようなものではないかと思えます。もちろん、文学部の教育ではこれらの能力を育成しようと力を入れています。しかし今回は法政大学文学部の90周年記念のシンポジウムです。一般的な文学部と他学部の比較ではなく、法政大学の文学部が、他大学の文学部や他大学の他学部とどう違うのかという点に焦点を当て、話を進めようと思えます。

このような機会には相応しくないかもしれませんが、まずは文学部についての二つのネガティブなイメージからご紹介したいと思います。一つ目は「文学部って就職に不利？」というイメージです。これはよく聞く言葉なのですが、では本当にそうでしょうか。既に公表されておりますキャリアセンターの資料によりますと、本学、法政大学全体の2011年度の内定率は97%です。この97%というのは、就職を希望した全部の学生のうちで内定をもらった学生の割合です。では、文学部の

内定率は他学部と比べてどうなのでしょう。文学部の2011年度の内定率は95.6%でした。文系学部の中で就職に強いと言われている経営、キャリアデザイン学部の内定率は98.4%でした。確かに、キャリアデザインや経営と比べますと、やや低いのですけれども、でも大きな差ではありません。しかし世間ではやはり「文学部って就職に不利じゃないの？」と思われると思うのです。このネガティブなイメージはどこから来ているのでしょうか。

一般的な特徴としてこれは否定できないところかなと思いますが、文学部には働くということにいまひとつ意欲的になれない学生が一定数おります。そしてもう一つ、社会人になるということに漠然とした不安を抱えている学生というのも、他学部と比べて多いのではないかと実感しております。

二つ目にご紹介するネガティブなイメージは「文学部で学ぶことは役に立たないんじゃないの？役に立たないことばかりやっているんじゃないの？」

というものです。では、社会に役立つ学びとはいったいどのようなものなのでしょう。実践的で役に立つこととは何なのでしょう。そして、それはいったいどこで学べるのでしょうか。これらの問いに答えつつ、法政大学文学部の取り組みを紹介していければと思っています。

本日お話しするポイントは三つございます。一つ目は、昨年度から開講しております文学部共通科目、「文学部生のキャリア形成」という授業です。金曜日の5時間目を開講しております。二つ目は「基礎ゼミ」という科目です。これは、入学直後の1年生向けに開講している授業です。三つ目は、ゼミをはじめとする少人数の専門教育です。これらは法政大学文学部の教育の柱となっている授業です。この三つの柱についてお話しいたします。

まず「文学部生のキャリア形成」についてですが、「文学部生のキャリア形成」というのは、就職活動をどう進めるか、どうやって内定を得るかの授業ではありません。そのような対策というのは、キャリアセンターが力を入れて担当しております。「文学部生のキャリア形成」ではむしろ、文学部の学生に自分が将来働いているイメージをしっかりと持ってもらう、考えてもらうということを目的にしております。この授業では、文学部の各学科の卒業生に来ていただき、講演いただく形式をとっております。さまざまな職種についていらっしゃる卒業生にご登壇いただき、どのような仕事をなさっておられるのか、ご自身の言葉で語っていただくことにより、受講生にはさまざまな仕事について知ってもらいます。おいていただく卒業生の方々は入社してから3年以上の経験を持つ人たちです。この3年以上の間にはやはり浮き沈みというものがあります。つらかった時、辞めたいと思った時、そして、それを乗り越えて、どういう楽しいことがあったか、その苦勞、やりがいなどを話していただいております。先輩方の経験話をいただくことにより、学生たちに自分が社会人として働いているイメージを持ってもらう、そして自分のキャリアについて考える機会としてもらうと考えております。

「文学部生のキャリア形成」は昨年度からの授業です。その昨年度の一番最後の授業で、ある学生が「私、いつかこの授業で後輩のために講演します」とコメントをくれました。少なくともこの学生にとってこの授業は、自分のキャリアをポジティブに考える良い機会になったのだなと思い、担当者一同、とても嬉しい気持ちになりました。そしてまた、この授業が文学部卒業生と在学生のつながりを強化することに寄与したのではないかとも思っています。

社会人はよく、「大学生のとき、もっと勉強しておけばよかったな」と言います。この台詞は私自身も実感する所ですし、卒業生からもよく聞きます。一方、「ああ、文学部じゃなくて工学部へ行っておけばよかった」とか「経済学部へ行っておけばよかった」というような台詞を聞くかという、そのような台詞はあまり耳にしません。社会人になるとどうやら、卒業学部を問わず、学生時代にもっと勉強しておけばよかったなと思うものようです。

これはなぜなのでしょう。大学での学びの重要性というのは社会人になってより一層、実感することなのではないかと思えます。何学部卒であれ、大学で得た知識は、もちろん実社会で役に立ちます。しかし即、役に立つということはほとんどありません。私は言語学の教員ですけれども、言語学で学んだ専門的な（マニアックな）専門知識がすぐに実践的に役に立ったというのはあまり聞きません。（もちろん、例外的なケースとしてはありますが。）どの学部でも、学んだ事がすぐに実社会で役立つかということ、そんなことはめったにないわけです。

では、先ほどの「勉強しておけばよかった」という台詞は、なぜ出てくるのでしょうか。社会人が勉強しておけばよかったと思っていることは何なのでしょう？私のゼミの卒業生達に聞いてみました。一番多かった答えは語学です。英語をもっとやっておけばよかった。仕事で英文を読まなければいけない、書かなければいけない、となったときに、語学の授業にちゃんと出て、宿題もやっ

ておけばよかった。もっとたくさん授業を履修しておけばよかったと後悔するようです。中国語もやっておけばよかった、スペイン語も学べたのというふう思うわけでしょう。

では、語学以外ではどのような勉強をしておけばよかったと思っているのでしょうか。実は「いろんな分野の幅広い知識、教養をもっと深めておけばよかった」という回答がとても多いのです。社会人の皆さんには納得していただけるところではないかと思います。一方、この答えは学生にはちょっと意外に思えるかもしれません。この幅広い知識というのが個々の人間としての幅となり、さらなる成長の土台となるのだと考えている人が多いようです。

結局のところ、社会人として必要とされている知識やスキルというのは、大学4年間でどれだけ一生懸命勉強したとしても十分とは言えません。私自身、まだまだ学び足りない日々思っておりますし、社会人として働く人々には同意いただけるでしょう。

何の仕事に就くか、自分の将来を予見できる人はいりません。自分に必要だと思われる勉強を先取りして出来る人はいないのです。「自分は会計事務所の助手になるから簿記を勉強しなければ…。でもドイツ語は使わないし歴史も使わない。」ということが在学中からわかる人はいないわけです。つまり将来の自分のニーズを先回りして、必要になることを学ぶことはできないわけです。では、大学では何を教えるのか。私たちは将来必要になるであろう、学びを続けるための能力を培い、学び続けるための手法を学んでもらいたいと考えています。卒業後もずっと学びは続くわけです。ですので、学生にはその基礎となる知識、学びを続けるための手法を学んで欲しいと思っています。

この学び続けるための手法を学ぶ最初の科目というのが「基礎ゼミ」です。この科目は、1年生の入学当初から開講しております。そこで扱っている項目というのは、ノートの取り方、レポートの書き方、論理的思考法、要約、プレゼンテーションです。このような内容をやりますと言ったとき、

学生は、「大学でこんなことを今更やらなければならないのか？」という反応を見せます。ノートの取り方なんかもう知っている。要約も受験の時に勉強した。こういうことを今更やらなければならないのか？

この基礎ゼミで学ぶノートテークは、ただ単に先生が話している内容を書き写す、講義のノートを取る、という内容ではありません。自分の考えや思考の過程、もしくは経験などなどを、将来利用できるように、活用できるように記録することを学ぶもので、とても重要な項目だと私自身は思っております。本屋のビジネススキルのところに行くと、ノートや手帳術に関する書籍がたくさん並んでいます。ノートテークが社会人になってからも必要とされるスキルだからではないかと考えます。ノートテークに限らず、基礎ゼミで学ぶ、レポートの書き方、論理的思考法、要約、プレゼンテーション、すなわち、情報をどのようにまとめて、どのように受け取り手にわかりやすく伝えていくか。これらは全て、社会人として必要とされるスキルなのです。

基礎ゼミは、高校生を大学生に、高校生の受け身の学びから、自主的な大学生の学びへの橋渡しと位置付けられていますが、大学に入ってから勉強をサポートするだけの授業ではありません。学びというのは先に述べたように一生続くわけです。そのずっと続く学び、自主的な学びの基礎となる能力を身に付けるための一番最初の授業です。

基礎ゼミから、卒論にかけての学びを通して、基礎ゼミで学んだスキル、つまり情報の受け取り手を意識して伝える能力、分析的、論理的思考力、これらの能力をしっかりと身に付けてもらえるように、文学部では専門教育を行っております。

基礎ゼミから先の文学部の専門科目の特徴は、少人数の授業、演習（ゼミ）、そして必修の卒業論文です。これらは文学部の特徴と言えるのではないかと思います。もちろん私は言語学が大好きですから、言語学の知識も身に付けてほしいと思います。しかし、それよりむしろ将来も続く、学びの土台を身に付けて欲しいと思います。分析的

な思考力であったり、相手のことを考えて情報を発信する力であったり、言語学を通して、そのような学びの基礎を身に付けられるよう導いていきたいと考えております。

今回の講演にあたり、ゼミの卒業生達に、「文学部で学んだことで何か役に立ったことはありますか」と聞いてみました。そこに出てきた回答を最後にご紹介したいと思います。

一番多かった答えは、「何を書いたらいいのかわからないレポート課題で、何とかあがいて締め切りまでに終わらせた」というような事でした。社会に出たらこんな仕事が想像以上に多かったというのです。「何がもとめられているのか、よくわからないけれど、〇〇日までに何社に何枚、報告書・提案書を仕上げなければ…」と、こういう仕事を何とか汗をかき徹夜しながら上げることが少なくなかったというのです。このような時、あの時、授業で一生懸命レポートを書いたなど、昔の経験を思い出すのだそうです。

またある卒業生が次のようなことを話してくれました。文学部での経験というのは、感覚的な思考の学問と、客観的、論理的な思考の学問が共存していたと。私は英文学科の教員ですが、例えば英文学科は客観的な思考と分析的な思考を必要とする言語学と、文学とが共存している学科です。このような学科、学部だったので、自分は客観的な思考と、感覚的な思考の切り替えが意識的にできているような気がすると言っていました。

社会人力というと、みんな論理的思考を挙げます。論理的思考はもちろん大事です。レポートを書く、企画を立てる、そういうときに論理的思考は大事なだけでなく、顧客相手に営業をしていく際に一番大事なのは、やはり人間と人間とのコミュニケーションであり、理屈ではないところのほうが大事だと実感するのだそうです。そういうときにはこの論理的なスイッチを切って理屈っぽくならないように、時には根性だけで、誠意を持ってがむしゃらに付き合っ、いざ文章に起こすとなったら、卒業論文執筆の時に先生に怒られた時のことを思い出して、「客観的データ、論理的思考」と思いながら意識的にスイッチを切り替えている自分に最近気付くのだ、と言っていました。「だから、卒論執筆の時に先生からの修正の多さにくじけそうになったら、それはいつかこういうふうな役に立つんだと学生たちに伝えてください」と彼は最後に後輩へのメッセージを残して行きました。

本日は、法政大学文学部での三つの取り組みについてお話ししました。その三本柱のうちの一つ、キャリア形成の授業というのは昨年度始まった授業です。ですので、その成果というのは、まだ目に見えるかたちで検証することはできません。けれども、私たちが得ている手応えというのは大変大きいものです。これらの授業での経験は、きっと将来的に文学部の学生の力になってくれると思います。

基礎ゼミから卒業論文まで

法政大学文学部
心理学科教授 福田 由紀

法政大学文学部の必修科目である「卒業論文」を作成するプロセスの中で「問題発見力」と「計画力」が養われます。それらこそが社会で求められる力です。つまり、大学生活における最終的な成果である卒業論文を書くことが、社会で求められているのです。

本当に「問題発見力」と「計画力」が社会で求められているのでしょうか。例えば、職場の中で、明るくて素直で言われたことはできる人がいるとします。しかし、その人は指示がないと何をしたらいいかわからないし、やろうとはしない。事細かに指示を出さないと、うまくこなせないし、決められたスケジュールがないと締め切りに遅れることが多々ある。このような人が職場にいたら、いっしょに仕事をするのが難しいのではないのでしょうか？職場はサークルと違い、仲良く集団ではありません。もちろん、仲良くすることも重要ですが、まずは仕事をするのが第一です。互恵的な人間関係の中で仕事をし、成果を出すことが一番でしょう。その際に必要な力が「問題発見力」と「計画力」です。

では、なぜ卒業論文を書くに「問題発見力」と「計画力」がつくのでしょうか。その理由は以下の4つにまとめることができます。第1に卒業論文のテーマは自分で見つけなければなりません。第2に自分のテーマをその学問領域にのせなければなりません。第3に自分自身でタイムマネジメントをしなければなりません。第4にすべては自分の責任です。そして、単なるエッセイではない長い論文を仕上げなくてはならない。誰も助けてはくれません。3月の学位授与式に出席できるかどうかは、自分一人で行った卒業論文の評価にか

かっています。

ある学生の卒業論文作成の例をあげてみましょう。ある日、彼は「電子書籍」というテーマを福田の所に持ってきました。テーマの発見にはそれまでの授業や演習の中での知識とかスキルが土台になります。同時に心理学の場合は、日常生活の中でたくさんその素材が転がっています。電子書籍は現在社会で話題になっているとてもいいテーマです。ただ、「電子書籍って面白そうだな」だけでは卒業論文にはなりません。そこで、指導教員は学生と問答をしながら、テーマを心理学の領域に落とし込んでいく。具体的には、実験や調査といった方法で実証できるようにテーマを絞っていきます。

教員：電子書籍の何が面白いの？

学生：紙媒体に比べたらちょっと読みづらそうかな、あるいは、持っている人はできるように見える、ハードは手になじむの？ちょっと重たいかな…

教員：読みづらそうかぁ…。読みづらそうというのは、つまり、心理学の中ではどういうことなの？

学生：心理学の中では…。「読みやすさ」ですかね。

教員：うん、読みやすさは、速く読めることなのかな。理解しやすいってことなのかな。漢熟語が少ないってことかな…

学生：うーん。速く読めて理解しやすいってこと。難解な文章を読むのは時間がかかるし…。間違った理解はだめですね。

教員：そうだね。じゃあ、まずは読む速さを考えると？

学生：読み時間ですね。それを測定する。

教員：読み時間はどうやって測定する？

学生：SuperLab（実験プログラムの名前）を使って…

このように学生は具体的な実験手法を明確にしていきます。もちろん、やり取りは1回きりで終わるものではありません。実験プログラムの動かし方は？分析方法は？…何度となく、授業内外を問わず、教員との問答を通して学生は自分の卒業論文を作っていきます。

このようなプロセスをみると、何かを思い出しませんか？ そうです。職人の世界です。職人の世界で行われている徒弟制は、卒業論文を作成するプロセスと似ています。寿司職人をイメージしてください。ある人が寿司職人になろうと思ってお店に入ります。最初に勤めた時には、寿司は握らせてくれません。たぶん、皿洗いとか店の掃除から始まるのではないのでしょうか。そういう仕事をしながら、新入りは先輩の職人たちの技を盗んでいきます。そして10年後、やっと寿司を握れるようになります。そこでまた修業をして、最終的に一人前の寿司職人になっていきます。

その人が寿司職人になった時には、きっと寿司に対する知識や握る技術が身についているでしょう。同時に、寿司職人としてのアイデンティティも獲得されています。寿司職人としてどういう立ち居振る舞いをするべきか、お客さんとどのように接するべきか、どうやって店を経営すべきか、そういったことを徒弟制という方法で職人たちは学んでいきます。

このような職人の世界の徒弟制は学校教育にも当てはまります。これを「認知的徒弟制」と呼んでいます。寿司職人と大きく違う点は時間です。大学の場合には10年もかけていられません。そのため、学生は教員の知識とか技を盗むことはせず、効率的に教えてもらえます。しかし、教員は全てを教えるわけではありません。教員はいろいろな選択肢を出し「こういう考えもある、ああいう考えもある。さあ、あなたはどれがいいですか」のように、学生の漠然とした興味を絞っていくお

手伝いするだけです。そして、学生は卒業論文を完成できるころには、心理学の知識やスキルだけではなく、心理学の学徒としてのアイデンティティを身に付けています。

心理学の学徒としてのアイデンティティを身に付けるとはどういうことでしょうか。それは、心理学のものの見方や考え方をするとということです。心理学のものの考え方とは何か。例えば、アイデアは実証されて初めて良いアイデアになる、数字にだまされない、そういう見方を身に付けて卒業していくわけです。

以上のことだけでも、卒業論文の作成がいかに重要かは、おわかりになると思います。加えて、卒業論文を作成するタイムマネジメントも学生自身がしなくてははいけません。今年度の卒論の提出日は1月9日、10日になっています。1分でも遅れたら認められません。さらに、例えば福田のゼミでは、12月6日に完成原稿を仮提出しなくてははいけません。完成原稿を12月6日に出すためには、実験が10月中に終了してはいなくてははいけません。実験は、大体1カ月から1カ月半ぐらいかかります。実験を10月中に終わらせるためには、9月中旬に始めなければならない。実験をするためには参加者の募集が必要です。その募集は後期が始まってすぐ行わなくては間に合いません。通常、参加者の募集は授業の中で2~3分アピールさせてもらう形式で行います。そうすると、募集したい授業の担当の先生方にその旨を頼まなければなりません。そうすると、後期の最初の授業で参加者募集をやらせてもらうためには、実は、前期中に頼んでおかなければいけない。非常に長いスパンのタイムマネジメントを学生は一人で行わなくてはなりません。多くの学生は1週間単位の生活の中で、それまでスケジュールリングをしていますので、学生さんにとってみるとチャレンジな課題です。

さらに、卒業論文は提出しただけでは通りません。提出後に口頭試問があり、発表して質問に答えなくてはならない。誰かのまねをただけの実験では、鋭い質問に答えられないでしょう。自ら

がテーマを発見し、実験を行い、分析し、考察をしてはじめて、様々な質問に適確に答えることができます。

このような卒業論文の作成過程を通して、社会に通用し求められている問題発見力と計画力が身に付いていきます。法政大学文学部では、4年間の集大成として卒業論文が設定されています。こ

れを完成できた人だけが卒業していきます。

社会で求められている「問題発見力」と「計画力」は、「卒業論文を作成する過程」で養われます。卒業論文を必修としてカリキュラムに位置づけている文学部では、学生の生涯キャリア計画の最初の一步を後押ししているといえるでしょう。

パネル・ディスカッション報告 文学部卒の底力

法政大学文学部 小林 ふみ子
日本文学科准教授

文学部教育の社会的意義を考えるにあたって、理論だけでなく卒業生に体験談を聞いてみようという4名にお集まりいただき、社会人としての体験の中で、学部で学んだことがどう生きてきたのか、実際のところを聞いてみた。以下、司会としてそれをまとめたものである。

お話をいただいたのは2007年哲学科卒業の芳野詩子さん（株式会社セガ）、2007年日本文学科卒業近藤和樹さん（ハイアットリージェンシー東京）、2001年史学科卒業の夏目享宏さん（株式会社VSN）、2007年地理学科卒業の持田隼人さん（三菱UFJ信託銀行）の4名であった。

文学部らしく、「好きなこと」から学部学科を選んだという近藤さん、夏目さん、持田さん。それに対して、やりたいことが決まらなかったからこそ自身の可能性を狭めないようあらゆることを考え学ぶ対象にしたいと哲学科を選んだというのが芳野さん。フランス哲学のゼミに入ったという。難しい文章に何が書いてあるのかを一生懸命なんとか読み解き、ゼミでのレポートにまとめる中で、どう伝えれば人が受け入れてくれるのか、表現の要を総合的に学んだ気がする、と大学時代を振り返る。

卒業生の皆さんは、これまで、また現在の仕事の中で文学部の学びとつながるものを感じられているのか。

芳野さんは、ゲームの企画発足、キャラクターのセリフから説明書までの具体的な制作、さらに完成後のPRにも携わる中で、まず日々、ゼミで培った調査、要約、表現の力が役立っているという。とくに難解な文章に取り組み、考え抜いた経験は、ゲームを面白くするために、その面白さの本質とは何か、これに要るものと要らないものは何か、考え抜くことに通じていて、そこでは粘り強く考える哲学の訓練が生きているという。

近藤さんは、ホテルでフロント、また広報と宣伝の仕事に携わる中で、日本文学科の学びによって身につけたことが生きていると感じるのは、ビジネスマナーとしての会話力と文章力だということ。顧客とのやりとりでも、広報業務上の文章の作成や校正における「てにをは」の訂正から微妙な表現の調整などでも、とても重要なスキルとして生かされているとのことである。

夏目さんは、現職の前の6年間のコーヒーチェーン直営店の店長経験をはじめとし、さらにITのシステムインテグレーター、さらに今の株式会社

VSN で電機メーカーに出向して SE と、さまざま仕事を経験されたそう。その中で臨機応変に対応できるようになったことに文学部での経験がかかわっているという。スケジュールに合わせて計画的に、予算も考えながら仕事を進めながら、そこで人員を配置し、そのメンタルな面もカバーしながらやっていくという、違う分野でマルチに動くことができています。そのことに、文学部での学びの中で養った論理的な思考と感覚的・直感的な思考の切り替え、両立の経験が生きているのではないかとのこと。また卒業論文で、スケジュール管理、仮説の論証、他人に分かりやすく論理的に説得的に伝える努力をした経験も、後輩やユーザーに分かりやすく説明することにつながっているということも強調された。

持田さんは、主に不動産の仲介業での提案業務のなかで顧客の選択を見ながら、必ずしも合理的に物事が進んでいかないという経験を、それ以来、相手の考え方、好みや性格を探るため、話を伺うところに力を入れるようになったという。本、文学の好みから、たとえば築地のマグロを見に行っただ話などまで、雑談を交わしながら自身を表現しつつ、相手についてもよく耳を澄ますことで、だんだん失敗がなくなってきたという。これもまた、文学部らしい、論理だけではない人間に対する深い洞察が生かされているところであろう。

以上のお話、また終了後の全体討議をふまえて、文学部生は社会に出たときにどこを強みにできるのか、まとめてみたい。

もっとも重要な点は、人間を複合的に理解し、柔軟に対応できるようになるということであろう。哲学であったり、文学であったり、歴史や地理、心理と、アプローチのチャンネルは異なっていますが、人間が必ずしも合理的な判断をするとは限らない、矛盾した存在であることを、さまざまな資料・史料、また実習や実験、それらの分析などを通してよく知ることになる。そうした文学部の幅

広い学びの中で出会える、さまざまな知識・教養は会話の引き出しとしても人間理解、人間関係の構築に役立て得るという実例を、本シンポジウムで登壇いただいた卒業生に見ることができた。

また徹底した論理的思考という点でも強みを発揮し得る。最後の全体討議のなかで、流動的な社会現象を相手にする学問に比べ、安定したテキストを分析対象にする学問では多面的にそれにアプローチしていった高みに到達するということを徹底的に行いやすいという指摘があったが、その実例がまさに哲学科や史学科での経験談ではないだろうか。その多面的な柔軟な思考から生まれる新たな発想が「コンテンツ」を生み出す力ともなっていき得るだろう。

そして、やはり文章力、言葉の力である。全体討議では、他学部とは違うレベルで文学部でそれが身につくというのは、事実としてどうあるのか、矜持や感覚として共有されているに過ぎないのかということも会場から問われた。

しかし、それは最後に卒業論文を必修として課すことで、必ず、自ら立てた問いに対して言葉によって確実に他人に伝わるように論証を行うということ、個人差はあれ確実に鍛えられるといえるはずだ。そのゴールに向けて、初年次教育をはじめとして四年次に至るまで、主語と述語の対応関係、読点を打つ位置など基本的なところから育成していく。テキストを土台にした学問を行う学科では、その読解においても言葉に対する厳密な感覚が求められ、養われる。

以上のようなことを文学部卒業生の強みとして社会に訴求していかなければならないし、それはディスカッションの最後でパネリストから現役生に向けた助言として出た、しっかり学ぶこと、学びの幅、経験の幅を広げることに通じている。そして、社会に学生を送り出す側としても、そうした力を意識的に養ってゆくことが課されているということがよく分かるパネル・ディスカッションであった。